広島市小社研会報

令和６年１月、２月、３月　第２７１号

研究主題
社会をみつめ、未来を問い続ける社会科教育の創造
－教材の意味からせまる授業づくりを通して－

１月に行われた第３回研究会では、授業公開された先生方、運営を担当していただいた先生方をはじめ、ご参加いただいた先生方に深くお礼申しあげます。今回は、３会場で参集しての公開授業、１会場で録画授業の形で実施されました。参観者による活発な意見交換が行われました。また、録画授業では、研究会の時期に左右されない単元の授業が見られ、よかったとの意見や準備や打ち合わせに改善点があるなどの意見がありました。寒い中、準備や当日の運営では、会場校、並びに運営の先生方には本当にお世話になりました。ありがとうございました。第２７１号では、各授業者の振り返り、協議会報告等を紹介させていただきます。

今年度、社会科同好会は３回、基礎講座は２回実施されました。ご多用の中、ご参加くださった先生方ありがとうございました。研究部でも研究主題についての検討を進めています。来年度、市小教研が統合され、これまでと変わってくることもあると思いますが、研究をより一層深めていきましょう。

第３回　教科研究会から

４年「特色ある地域と人々のくらし」
～日本酒づくりのまち「酒都・西条」～

大州小学校　　教諭　　安本　顕馬

「楽しかった！」というのが、授業を終えた正直な感想です。子どもたちも、いつも以上に授業を楽しんでくれていたように思います。今回、授業に取り上げたのは「西条」。これまで、広島県と言えば…カキ、レモン、お好み焼き、日本酒、もみじ饅頭とたくさん思い浮かぶものがあるのにも関わらず、日本酒が取り上げられていないことに疑問を感じていました。少々「西条」という場所に思い入れもあり、いつかは授業で扱いたいという願いを叶えることができました。

授業では、子どもたちが生き生きと発言する姿を見ることができました。これまでの授業の積み重ねが、子どもたちの発言の質を高めていたように感じました。改めて、子どもはすごいと思いました。自然とこれまでの学習と比べたり、結び付けたり、一人一人が自分なりの考えをもつことができていました。

課題としては、子どもたちの考えを、子どもたちの中でつなげて深めること。どうして

も担任が中継役として考えをつなげることが多くなっていました。子どもたちを信じ、子どもたち自身が考えを深めていけるように、担任はサポート役になれるよう今後の授業では手立てを考えていきたいです。

「西条」の酒づくりを通したまちづくりの単元計画は、まだまだしっかりとしていませんが、今回の提案で少しでも多くの先生方に興味をもってもらえればうれしいです。そして、社会科の授業づくりを「楽しい！」と感じる先生が一人でも増えればと願っています。

子どもたちの熱意と意欲には改めて驚嘆させられました。どんな授業でも主役は子どもだということを再確認するとともに、子どもたちの反応・発言を大切にしながら、これからも授業づくりに取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、研究会に向けて協力していただいた先生方、４月の全体会で半ば強制的に幹事をお願いした先生方、授業づくりに助言をくださった校内の先生方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

協議会報告

荒神町小学校　　教諭　　長﨑　亮

第３回の研究会では、広島市立大州小学校の安本顕馬先生に「特色ある地域の人々のくらし」～日本酒づくりのまち「酒都・西条」～の授業を実践していただきました。一から教材を作られ、とても魅力のある授業、学級を見せていただきました。

授業後の協議会では、まず導入で提示された一枚の写真に対して、子どもの様々な気付きや予想が引き出されてとても良かったという意見が挙がりました。次に先生の子どもの発言に対する反応がとても有効だったという意見も挙がりました。普段から「社会的な見方・考え方」を広げる切り返しを行っているところがとても参考になりました。そして、先生が準備されていた「日本酒」が子どもの興味関心を高める手立てになったという話になりました。安本先生が実際に現地へ出向き感じたことの話や、そこで撮った写真もとても効果的な「実物」になっていたようです。授業の後半に出てきた「日本酒の生産量ランキング」のグラフから、「酒都・西条」と呼ばれているにも関わらず、生産量ランキングは低いことが分かりました。とても面白いグラフで、提示するタイミングなどの意見が挙がりました。安本先生の授業を見られた先生方は、生き生きとした子どもの姿を見て、とても参考になったと言われていました。

本授業では、広島市教育委員会　指導第一課　石中　伸弥指導主事　広島市立大州小学校　廣藤　誠校長に御指導・御助言を頂きました。石中指導主事から、授業を通して光る子どもの姿や教材を作る際に意識しておくべき点など丁寧に教えて頂きました。廣藤校長からは、教材研究におけるネットを活用した資料の集め方や安本先生が四月から意識して続けてこられたことなど教えて頂きました。

とても勉強になる時間であり、来年からの研究につながる素晴らしい実践でした。

５年「情報と人工知能が変える産業とわたしたちの生活」

温品小学校　　教諭　　古田 泰一

この授業では、単元名を「情報と人工知能が変える産業とわたしたちの生活」とし、「人工知能が台頭してくる未来で、児童一人一人がどのように人工知能と向き合っていくのか精度の高い見通しをもつ」ことを目標としました。そこで、主な活動として『人工知能が変える私たちの生活』と題し、それまでに学習したことを生かして、人工知能が変える未来について５０文字～７０文字でまとめるという活動を４時間にわたり毎時間行いました。

当初、多くの児童が「人間よりも人工知能の方がすごい。」「人間が人工知能に支配される。」と人間と人工知能の関係について、人工知能が優位だとまとめていましたが、授業を重ねるにつれて、その関係が少しずつ逆転するような見方・考え方の変容がありました。「人工知能に人間が支配されてしまう」と最初の授業で危機感を露わにしていたある班は最後には「人工知能は産業で人手不足や苦手なところをサポートし、人と共存していく。また人工知能を使い、辛い思いをする人などを喜ばせ、人々の暮らしやすい世界にしていく。」とまとめています。こうしたことからも、児童の人工知能に対する見方・考え方の変容を見ることができました。

一方で、「人と共存していく」とありますが、「共存」という言葉は生物に対して使用する言葉であり、人工知能のような「モノ」に対して使用するものではありません。児童の語彙力不足の可能性も考えられますが、「人工知能には人格のようなものがある」といった認識の錯誤が払拭しきれなかったのは課題だと感じています。

人工知能の評価は現在も定まっていません。それどころか、明確な定義すら存在しません。そのような中で人工知能を中核教材として扱うことは、自分の中でもかなりチャレンジングでした。課題や反省も多々ありますが、この半年間で教員として大きく成長できたと思います。このような機会をいただき本当にありがとうございました。

協議会報告

人工知能とわたしたちの未来は？　古田先生の提案に続こう

阿戸　小学校　　教諭　　松崎　智子

古田先生は、授業者に決まった時から「授業で人工知能 ChatGPT や CANVA を扱いたい。児童はこの先必ず人工知能と出合うから。でも、どこまで扱えるか調べないと分からない。」と話されていました。その後、２０２３年の文部科学省『初等中等教育段階における生成ＡＩの利用に関する暫定的なガイドライン』から、授業で生成ＡＩを扱うことが可能だと考えられました。

本時では、人工知能についての学びに「広島らしさ」を加えたいという授業者の思いから、広島市出身の大学生である庭田さんの「記憶の解凍」プロジェクト（人工知能による白黒写真のカラー化)」から二つの事例を取り上げました。一つは、原子爆弾投下前の家族写真をカラー化したことにより、認知症を患う高橋久さんの過去の記憶を蘇らせた事例です。提示した途端に「わぁ、すごい。」「何が映っているかはっきりわかる。」という驚きの

声があがりました。もう一つは、濵井徳三さんの事例です。濵井さんの両親は散髪屋を営んでおり、その店の前で母と撮った写真が、映画「この世界の片隅に」の冒頭３秒に使われています。濵井さんは、そのワンシーンを観るために何度も何度も映画館に足を運んだそうです。「その気持ちを、想像してください。」と、授業者は児童に投げかけました。児童は、人工知能によってカラー化された写真が、どれだけ家族を失った者の心に寄り添うことができたか、じっと考えました。ここから、本時のめあての「人工知能が変える未来で、君たちはどう生きるか」に迫っていきました。児童はワークシートに自分の思いや考えをまとめ、その後グループに分かれ、考えを集約しました。「未来の主人公は人工知能？それとも人間？」「わたしたち人間は何をするべきか？」これらの問いに、各グループは「人工知能と人間の能力は比べるものではなく、良い面を出し合って、共存することが大切である。」などと、答えていました。

協議会では、授業の導入で、庭田さんの取り組みについて担任が児童に説明する時間が長いか否かについて議論になりました。話を短くし、児童の活動時間を増やすとよいという意見や、社会科の授業は授業者が「語る」という場面も必要で、時間配分はこれでよかったという意見も出ました。また、これまでに話し合いの学習の積み上げがなされており、児童の思考力が鍛えられているといった意見もありました。

指導講話では、単元構成の仕方だけでなく、「人工知能」という新しい視点での授業提案でありながら心情に迫るものであったことや、それでいて、人の気持ちに引きずられることなく、「人工知能と人間の共存」といった言葉が児童から出ていたことについて評価していただきました。一方、一部の児童からは「共存」ではなく、「協力」というワードが出てきており、「共存」との意味の違いも知っていく必要性について、ご指摘いただきました。また、教師は一人ひとりの子どもの成長を願い、子ども中心の問題解決学習が展開されることが望ましく、そのような授業を通して、社会的事象の見方・考え方を習得させ、今後の学習に繋げていくことが大切であると、ご指導いただきました。そういった意味では、今回の授業提案は、子どもたちの思考に沿う問題解決学習であったと、高南小学校　原紺教頭先生にお話しいただきました。

「人工知能」に焦点を当て、新しい提案をされた先生の熱意と、多くの教材研究・教材作成により、児童は人工知能に対する新しい視点をもつことができました。そのことは、児童、私たち教員にとって、大変意味のあることだと思います。今回の授業を基にして、これから「人工知能」に関する授業がさらに広がっていくことに期待し、人工知能を使いこなす人が育っていく未来を考え、わくわくしました。

「参観がたった１２人なんて、もったいない！たくさんの人に見ていただきたかった。」

授業報告

６年「世界に歩み出した日本～不平等条約改正と２つの戦争～」

神崎小学校　　教諭　　河村　明伸

今回、久しぶりに教科研にて授業提案をさせていただきました。「教材の意味からせまる授業づくり」ということで、私は「外交」をキーワードに教材研究に取り組みました。

外交とは、自国の利害や主張を、対立する相手が存在する中で最大限実現しようとする営みであり、その帰趨の如何は、自国のみならず他国をも含む数多くの人々の幸不幸、運命を左右するものだと私は考えています。今日の日本を取り巻く世界情勢や諸課題に対し

て、外交交渉なしに事態の進展は図れません。児童に自国の外交のあり方についての関心を高め、外交という営みの意義について捉えさせたいと夏季研修会以降もずっと考えていました。

紆余曲折がありましたが、最終的にポーツマス条約締結を果たした小村寿太郎の交渉場面を取り上げて授業を構成したものを、教科研当日にVTRで観ていただき、たくさんのご意見をいただくことができました。「なぜこの条件で小村寿太郎は条約を結んだのか？」「ポーツマス条約は悪いものだったのか？」等、児童が深く追究していくための問いや手立てについて様々な視点から改善策を示していただきました。

小学校社会科で外交を取り上げること、さらに歴史単元で取り上げていくことの難しさについてもご指摘いただきましたが、私としては今回挑戦してみてよかったと思っています。挑戦してみたからこそ、たくさんの学びを得ることができました。教科研で授業提案をさせていただくことは、改めて授業者にとって学びの多いものであると感じました。

最後に、今回の授業提案をするにあたり、会場の準備や動画の編集をしていただいた幹事の先生方、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

協議会報告

似島学園小学校　　教諭　　亀谷　凌太

１ブロックでは、神崎小学校河村先生により、「世界に歩み出した日本」の単元で「不平等条約改正と小村寿太郎の決断について」という授業が行われました。先生は、「この学習の中で、当時の外交の難しさと重要性を捉え、外交という国家の働きの大切さを感じ取らせたい。」という願いをもって、教材研究に取り組まれました。当日の協議会では、次のような意見や反省点が挙げられました。

① 児童が意見を自分の言葉で言えている

授業の中で、児童の発言や話し合いの時間が多く取られていました。そこでは、自分の意見を今までの授業から学んだことや当時の国民の気持ちや政府の気持ちで考える姿が見られました。本時までの授業があり、ここまで発言できているという意見が協議会では出ました。

② なぜ、外交なのか

協議会では、「外交は難しい」という意見が多くありました。河村先生は、夏の研修会では「現代の外交」（G７サミット）などを取り扱うという内容でした。それを、大きく変え小村寿太郎にフォーカスを当てた授業展開となっていました。河村先生の教材研究と児童が社会をしっかり理解していることで今回の授業は進んだと感じられました。

【反省点】

① 外交を児童に伝える難しさ

今回の授業では、不平等条約改正に至るまでの小村寿太郎の決断に重きを置き、授業では小村が「ポーツマス条約」を結んだ決断は「よかった」のか「よくなかった」で始まりました。最終的には、児童が話し合いの結果で条約改正の納得度を％で表しました。そこ

で、意見は同じなのだが数値が違う児童がいたのでそこを掘り下げる必要があったのではないかという意見がありました。

② 児童が意見を討論する場面がなかった

上にも書いたように、授業の最後に「%」で納得度を表しました。しかし、同じ意見を持った児童が「違う」数値を表していたのでそこをメインとして話し合いをしても良かったのではないか。また、納得度を授業の最初に表して最後にもう一回表すことで児童の変化を取り上げても良かったのではないかという意見も出ました。

授業報告

江戸時代で学ぶ・江戸時代に学ぶ… 歴史を学ぶことの意味

川内小学校　教諭　吉田　剛人

広島の戦後復興を扱った6年生の政治の授業を提案したのはもう十五年も前だったと思います。久しぶりの授業提案でした。そして今回もいろいろな先生方に支えていただきました。まずは多くの先生方に感謝いたします。さて、今回の授業提案は…

① 江戸時代を学ぶ…歴史認識を子どもたちがどうつくるか

今回は、「世界的に見てもまれ！！なぜ江戸幕府は260年も続くのか」それをメインのクエスチョンとし、為政者、大名（藩主）、武士、町人、農民と、その時代に生きたいろいろな人の視点から、その時代像をつくっていきました。いろいろな立場から見つめることで、子どもたち自身の力で歴史認識をつくっていくことができたと考えます。

② 江戸時代で学ぶ・江戸時代に学ぶ… その時代から私たちは何が学べるか

平和で民主的で、豊かで、安心・安全な世界をいかにしてつくるか…それは時代や文化が違っても変わらないことで、その資質や能力を子どもにつけることが社会科のめざす究極的な目標です。本時では、「よりよい未来をつくるために私たちが江戸時代に学べることは何か」を考えました。授業での子どもの発言を一部紹介します。

みなみ　戦争とか争いとかばっかりを考えていたら心も苦しくなるだろうし、農民たちもつらくなる。だけど、お金を戦争とか、武器に使うのではなく、浅野さんとかみたいに町をいいように発展していく方向に使っていったら、いろいろな人が明るく過ごせたりとか、争いがなくて世界が平和になると思った。

健芯　今の時代は、岸田さんとか、そういう上の人が全部悪いとか、ぼくたちは言っている。だけど、江戸時代の農民たちは、自ら進んで村とかを発展させようとした。そういうところを今の日本にも取り入れると、日本も発展していく。

10年後、20年後、子どもたちが創り上げる未来が、平和で豊かで、だれもが幸せで自由な世界になることを祈ります。

協議会報告

『なぜ江戸幕府は260年も続くのか！？江戸幕府に学ぶ・・・未来のあり方』

広島市立川内小学校　教諭　中山　睦基

第三回社会科研究会で川内小学校の吉田剛人先生の授業を見させていただきました。私がこの授業を通して、学んだことが３つあります。

１つ目は、児童に多角的に考えさせることです。本時に至るまでに、幕府や藩、農民など様々な視点から考えさせていました。そうすることで「こういう思いがあるから、この政策につながった」や「幕府は、こんなことを恐れていたのではないか」など、一人一人が自分なりの江戸時代像を考えることができていました。本時でも、江戸時代が続いた理由を考えるときに、多くの視点から考え自分の言葉で説明することができたので、すごいと思いました。

２つ目は、社会科の授業ではつながりを大切にすることです。私が社会科を初めて指導したときに、大事なことを抑えさせたいという思いが強くなり、大事な言葉やその意味を単発的に教えていました。そのため、児童の知識の定着も浅かったです。しかし、吉田学級の児童はこれまでの学習内容を理解するだけでなく、学んだことをつなげて自分の考えをもつことができていました。そこで、吉田学級の児童のノートを見てみると、１つの資料だけで考えるのではなく、複数の資料を児童に渡しストーリーづけて考えさせることで人々の思いと政策などの流れがつながるようにされていました。このような取り組みを毎時間することで児童は一つ一つの知識を身につけるとともに、その知識から自分の考えにつなぐことができているのだと思いました。また、このような準備を毎時間されていたこともわかり、教材研究の大切さを再認識しました。

３つ目は、歴史を学ぶ意味を考えて授業をすることです。私は、歴史は今までの世界や人々の流れを知るために学習すると思っていました。しかし、吉田先生は「『なぜ、歴史を学ぶのか』を考えて授業をしている。」と言われました。また、「歴史を学ぶ過程でその時代の背景や施策を考えることによって、政治に対する見方・考え方を身に付けることにもなるし、今の時代を見つめて、この先の未来がどうあるべきかを考える力にもなっていく。」と言われていました。私は指導案のこの文を見たときは理解ができませんでした。しかし、実際に授業を見てみると児童は本時の学習問題を考えた後に、「農民も自分からできることをしていたので、政治家にヤジを飛ばすのではなく僕たちもできることはやっていく必要がある。」や「昔と同様に心の余裕がこれからの生活にも必要。」などこれからの自分たちの生き方についても考えていました。歴史から自分に学べるものを取り入れ、未来がどうあるべきかを考えることが社会科では大切だと感じました。

このように、今回の授業で多くのことを学んだと同時に社会科授業の考え方が変わりました。すべてをすぐに自分の授業に取り入れることは難しいですが、社会科の教材研究をする時には「なぜ、このことを学ぶのか」という視点を持って授業を組み立てるところから始めていこうと思いました。

【あとがき】

先日、社会科同好会に参加しました。川内小学校の吉田先生の発表のあと、最後に広島大学の永田先生の話の中で、歴史学習について印象に残ったことがあります。

一つは「江戸時代の次は、何時代？」と聞かれ、江戸時代までと明治時代以降では区分けが違うことを例に、歴史の見方・とらえ方はこれでいいのかを子どもに考えさせることも大切なのではないかという点。

次に、歴史のとらえ方はこれからも変わることがある。将来、正しいか正しくないかを判断するのは学習者本人であること。

最後に、社会科以外の先生がやってみようと思う授業実践。例えば、先生が歴史に詳しくなくても、資料を提示し、小学生に語らせる授業がいいのではないかという点。

あらためて６年生の歴史の授業づくりについて考える機会になりました。

令和６年度も社会科の授業づくりについて、先生方と意見交換をすることができる機会を楽しみにしています。

広島市小社研事務局次長　吉武　哲